

Title	聖徳大学所蔵『伊勢物語』絵巻について
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2012
Jtitle	三田國文 No.55 (2012. 6) ,p.17- 44
JaLC DOI	10.14991/002.20120600-0017
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20120600-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖徳大学所蔵『伊勢物語』絵巻について

辻 英子

はじめに

今回取りあげる絵巻の書誌を記す。「伊勢物語」上(下)二巻。井上公爵家旧蔵。近衛基熙詞書 土佐光起画 絹本着色。表紙(上縦三〇・〇糎×横二八・七糎、下縦二九・八糎×横二八・四糎)は朽葉色に牡丹を描く金欄、左肩の紙題簽に「伊勢物語」(縦一五・〇糎×横三・七糎)と記し(「上(下)」の記載はない)、小豆色の平打紐が付いている。象牙軸、見返しは金紙。料紙は詞書と絵とを連続する一枚の絹に描く。絹本であるが、ここでは第一紙、第二紙と数える。上巻本紙全長六五・二糎、詞六段、絵六図。下巻本紙全長六六・五糎、詞六段、絵六図、全十二段十二図から成る。本文は、日本古典文学全集本(学習院大学蔵三条西家旧蔵伝定家筆「伊勢物語」を底本とする)と同じく「初冠本(一二五段)」系統で、全集本の章段数によると上巻は、一、四、九、九、十二、二十九段、下巻は、五十八、八十七、八十七、八十七、九十九、百六段に該当する。

上下各巻末の落款には「土佐左近將監光起筆」、印章は「光

起之印」(白文方印)とある。三重の箱入り。外桐箱右肩に基熙公詞書「伊勢物語 式巻」、光起繪中箱中央に「伊勢物語 土佐光起画式巻」、漆塗りの内箱は無題、緑の平打紐、別添の包紙に一枚の大極札が収められている。その表に「近衛大閤基熙公伊勢物語二巻「琴山」(墨方印)」(図1)、裏に「絹地繪土佐將監光起乙九」了意」(墨印)」(図2)と記す。この筆跡および印章は案ずるに古筆了意(古筆家九代)の極めた極札であると考えられる。即ち「古筆鑑定必携 古筆切れと極札」の図版7「古筆了意極札(右)(図3)に照合すると、両者が符合すると認められるからである。また同書には、慶応三年(一八六七)板行の「和漢書画古筆鑑定家印譜」を掲載しており、それによると「九代古筆了意」の項に次のように記す。

実、神田道信定武一男了泉没後師家相統伝ヲ琴山印ヲ為第九世天保五年(一八三四)八月六日没八十四名定常 初称半之丞/改最長 鑑覚菴道古

本稿では、主として基熙、基賢、光起の筆跡について吟味していくことにする。

聖徳大学所蔵『伊勢物語』繪卷詞書

(上卷)

むかしおとこうみかうふりしてならの京 (二段)

かすかのさとしるよしゝてかりにいに
けりそのさとしとなまめいたる女はら
からすみけりこのおとこかいまみてけり
おもほえずふるさとしとはしたなくて
ありければこゝちまとひにけり男のきたり
けるかりきぬのすそをきりて哥をかきて
やるそのおとしのふすりのかりきぬを
なんきたりける

春日のゝわかむらさきのすりころも

しのふのみたれかきりしられす

となんをいつきていひやりけるついでお

もしろきことゝもやおもひけむ

みちのくのしのふもちすり誰ゆへに

みたれそめにし我ならなくに

といふうたのこゝろはへなりむかし人は

かくいちはやきみやひをなむしける

(繪一) (第1紙)

むかし東の五條におほきさいの宮のお (四段)

はしましける西の対にすむ人ありけり

それを本意にはあらてこゝろさしふかゝり

けるひとゆきとふらひけるをむ月の十日
はかりのほとにほかにかくれにけりあり
所はきけと人のいきかよふへきところに
もあらさりければ猶うしとおもひつゝ
なむありける又のとしのむ月に梅の花
さかりに去年をこひていきてたちて
見いてみゝれとこそにゝるへくもあらず
うちなきてあはらなるいたしきに
月のかたふくまでふせりてこそを思ひ
出てよめる

月やあらぬ春やむかしのはる

ならぬ

我身ひとつはもとの

みにして

(繪二) (第2紙)

ふしの山をみれば (九段)

五月のつこ

もりに

雪いとしろうふ

れり

時しらぬ

山は

ふしのね

いつとてか

かのこまたらに

雪の

ふるら

む

〔絵三〕 (第3紙)

猶ゆきくゝてむさしの国としもつさの (九段)

国とのなかにいとおほきなる川ありそれを角

田河といふそのかはのほとりにむれあて

おもひやれはかきりなく遠くもきにける

かなとわひあへるにわたしもりはやふねに

のれ日も暮ぬといふにのりてわたらむと

するにみな人もわひしくて京に思ふ人

なきにしもあらずさるおりしもしろき

鳥のはしとあしとあかき鳴のおほきさ

なる水のうへにあそひつゝいをくふ京

にはみえぬとりなればみな人見しらす

わたしもりにとひければこれなん

宮ことりといふをきゝて

名にしおはゝはいきことゝはん宮ことり

わかおもふ人はありやなしやと

〔絵四〕 (第4紙)

むかしおとこ有けり人のむすめをぬす (十二段)

みてむさしのへゐて行ほとにぬすひと

なりければ国のかみからめられに

けり女をは草村のなかにをきてにけに

けりみちくる人このゝはぬすひと

あなりとて火つけむとす女わひて

むさしのはけふはなやきそわか草の

つまもこもれり我もこもれり

〔絵五〕 (第5紙)

昔春宮の女御の御かたの花のかに (二十九段)

めしあつけられたりけるに

花にあかぬなけきは

いつもせしかとも

今日のこよひに

にる時は

なし

〔絵六〕

土佐左近将監光起筆 (白文方印)

(第6紙)

(下巻)

昔心つきて色このみなるおとこなかをか (五十八段)

といふ所に家つくりてをりけりそこ

のとなりける宮はらにこともなき女と

ものゐなかなりければ田からむとて此男

のあるを見ていみしのすきものゝしわ
さやとてあつまりていりきければこの
おとこにけておくにかくれにければ
おんな

あれにけりあはれいくよの宿なれや
すみけむ人のおとつれもせぬ

といひてこの宮にあつまりきみてあり
ければ此男

律おひてあれたる宿のうれたきは
かりにもおにのすたくなりけり

とてなむいたしたりけるこの女ともほ
ひろはんといひければ

打わひておちほひろふときかませは
われもたつらにゆかましものを

〔絵一〕（第1紙）

昔おとこ津のくにむはらのこほり芦（八十七段）
屋の里にしろよしゝていきてすみけり
むかしのうたに

あしのやのあなたのしほやきいとまなみ

つけのをくしもさゝすきにけり
とよみけるそのさとをよみけるこゝをなん

あしやのなたとはいひける此男なま宮つか
へしければそれをたよりにて衛府のすけ

ともあつまりきにけりこのおとこのこのかみ

も衛府のかみなりけり其家のまへの

海のほとりにあそひありきていさ此山の
かみにありといふ布引の滝みにのほら
むといひてのほりてみるにその滝ものより

ことなりなかさ二十丈ひろさ五丈はかり
なる石のおもてしらきぬに岩をつゝめ

らむやうになん有けるさるたきのかみに
わらうたのおほきさしてさし出たる石

あり其いしうへにはしりかゝる水は
せうかうしくりのおほきさにてこほれ

おつそなる人にみなたきの哥よます
かの丞ふのかみまつよむ

我よをはけふかあすかと待かひの
なみたの滝といつれたかけん

あるしつきによむ
ぬきみたる人こそあるらししら玉の

まなくもちるかそてのせはきに
とよめりければかたへの人わらふ事にや
ありけむ此哥にめてゝやみにけり

〔絵二〕（第2紙）

かへりくる道とをくてうせにし宮内卿（八十七段）
もちよしか家のまへくるに日くれぬやとりのかたを

見やればあまのいさりする火おほくみゆる
にかのあるしの男よむ

晴る夜のほしか川辺のほたるかも
わかすむかたに海士のたく火か
とよみて家にかへりきぬ

〔絵三〕（第3紙）

其夜みなみのかせふきて波いとたかし（八十七段）
つとめてその家のめのこともいてうき

みるのなみによせられたるひろひて
家のうちにもてきぬ女かたよりそのみるを
たかつきにもりてかしはおほひて
いたしたるかしはにかけり

わたつ海のかさしにさすといはふも
君かためにはおしまさりけり

〔絵四〕（第4紙）

むかし右近の馬場のひをりの日むかひ（九十九段）

にたてたりける車に女のかほのしたす
たれよりほのかにみえければ中将
なりける男のよみてやりける

見すもあらずみもせぬ人のこひしくは
あやなくけふやなかくらさむ

返し

しるしらぬ何かあやなくわきていはむ
おもひのみこそしるへなりけれ

〔絵五〕（第5紙）

昔男みこたちのせうえうし給ふ（百六段）
ところにまうて、龍田川のほとりにて

千早振神よも

きかず龍田川

からくれなるに

水くゝるとは

〔絵六〕

土佐左近将監光起筆「光起之印」（白文方印）

（第6紙）

此伊勢物語画圖十二段之

詞書者近衛殿基熙内大臣公貴墨

也斯誠可謂奇珍仍為後證不

顧魯蒙微官加草名者也

寛文第八曆小春後六日

権中納言藤原基（花押）

一 染筆者について

近衛基熙（慶安一（一六四八）—享保七（一七二二））、江戸時代の公卿。尚嗣の子。母は後水尾天皇皇女昭子（女三宮）。

法名悠山、号は応円満院禅閣。一六九〇（元禄三）関白、一七〇九（宝永六）太政大臣。二二年（享保七）出家、有職故実に精通し、和歌・絵画をよくした。著書に「基熙公百首」等が

ある。⁽³⁾(藤原基賢の)奥書によると、基賢が『伊勢物語』の詞書を書いたのは「内大臣」のときとある。『公卿補任』により任官時をたどると、次のようである。

寛文五年^乙 内大臣〔正二位〕 近衛藤基熙十八 六月一日任

(右大将如元)。

寛文八年^{申戊} 内大臣〔正二位〕^{二十} 右大将。十二月廿八

日転左大将。

寛文十一年^{癸辛} 内大臣〔正二位〕^{五十} 左大将。五月廿五日

転任右大臣(左大将如元)。

奥書に「寛文八年十月二十六日 権中納言藤基」とあるのは、内大臣基熙の時に権中納言であった「東園藤基賢」のこと、翌寛文九年十二月二十七日に権大納言に任ぜられている(『公卿補任』)。

基賢については『諸家伝 十三』『東園』の項に次のように記す。

(基教朝臣男) 實権大納言基音卿次男 母谷出羽守衡長女

寛永三九廿三(廿二)誕生

○明暦二正十一三木卅一歳

○寛文元〔四月廿五日改元〕十二廿四権中納言卅六歳

○同九十二廿七任権大納言四十四歳

貞享三年七(八)月十九日入道五十三(六十一)歳(法名常

算)

宝永元年七月廿一日薨七十九歳

このように見てくると、寛文八年当時、基賢は四十三歳であり、同年に基熙公が『伊勢物語』の詞書を書いたとすると二十歳歳の時の筆ということになる。

土佐光起(元和三(一六七一)元禄四(一六九二)は江戸前期の土佐派の絵師。光則の子、承応三年(一六五四)宮廷絵所預となり、土佐家を再興。のち落髪して常昭と号し、法橋となる。保守的な土佐派に狩野派の画風を導入し、新様を創造した。代表作「北野天神縁起絵巻」などがある。

『伊勢物語』絵巻上・下巻の画図の落款には「土佐左近将監光起筆」、印章「光起之印」(白文方印)(図4)とある。本絵巻は、画面上に詞書が描かれている箇所もあることから、詞書は画図制作後に書かれたとみられる。基賢の識語によると画図は寛文八年十月二十六日(光起五十二歳)以前の作と考えられる。

「光起」の落款の字形に二種類ある。たとえば、「起」の走籠の書き方に、この『伊勢物語』(図4)と同じくずし様の文字を用いる場合に、「2(右) 柳枝小禽図/左) 竹菊小禽図 双幅」(図5)および「3(右) 粟に鶉図/中) 簡狄図/左) 秋草に鳩図 三幅」(図6)の落款がある。その他に、走籠の終筆を交差したように書く(11 桔梗に鶉図 一幅)場合(図7)が六例ある。本絵巻の光起の署名は「図6」に近似する。印章の位置は、「起」の半ばにかかる(図4)場合、筆の文字

の上に押す(図5・6)、「筆」の冠部分を避け押印する(図7)などがみられるが、これらは作品の制作年代に関わることであろうか。

二 筆跡について

近衛基熙

『伊勢物語』絵巻上巻は初段に二首の歌を載せる。二首目「みちのくの」(図8)の歌は、松井文庫所蔵『小倉山荘色紙和哥』の十四番目に同歌(図9)を載せ、同「筆者目録」によると、「近衛内大臣」の筆とする。同じく六十四番目の「あさほらけ」(図10)の歌も基熙筆としている。

まず『伊勢物語』「みちのくの」の歌を『小倉山荘色紙和歌』(図9)の筆跡と比較してみると次のようである。

河原左大臣

みちのくの
* * *
しのふもち
* * *
すりたれゆへに
* * *
みたれそめ
* * *
にし
* * *
なら
* * *
なく
* * *
に

右の*印を付した文字は両者に近似性のみられる文字を表

す。字母を示すと次のようである。

く(九) の(乃) し(志) も(毛) ち(知)
す(春) り(利) ゆ(由) へ(部) に(尔)
み(見) た(多) そ(曾) な(奈) ら(良)
く(久)

このように両者は同筆であり、いずれも基熙の真跡であると認めてよいであろう。ついで六十四番目の歌については比較の詳細は省くが、参考のために図版(図10)を挙げておく。

権中納言定頼

あさほらけうちの
川霧たえくくに
あらはれわたる
せゝのあしろ木

以上の検証の結果、『伊勢物語』絵巻の詞書は近衛基熙真筆であると考えられる。なお基熙筆『伊勢物語』の字母の用法にはかなり特徴が見られる。例えば、
宇果 木 所 遅 都 二 悲 日 布 母 梨 乎
などの文字である。

藤原基賢

先に挙げた下巻奥書の内容は次のようである。

この伊勢物語画図十二段の

詞書は近衛殿基熙時に内大臣公の貴墨

なりこれ誠に奇珍と謂うべし仍て後証のために

魯蒙微官を顧みず草名を加ふるものなり

寛文八年十月二十六日

権中納言藤原基（花押）（図11）

基賢に関する信頼できる自筆資料として、宮内庁書陵部所蔵

『改元部類記』十五冊（伏・208、縦二八・八糎×横二一・〇

糎）（宮内庁書陵部図書課文書研究官 杉本まゆ子氏ご教示）が

ある。その奥書（図12）に次のように記す。

此一冊右大将殿廣通自筆本被許歴覽之間

令懇望遂書功訖 可秘々々

于時

明暦三年九月十一日

参議藤原基（花押）

これは基賢が明暦三年（一六五七）参議であったときの筆跡で

ある。『伊勢物語』奥書の寛文八年（一六六八）には権中納言

で、それ以前の筆跡であるが、署名・花押ともに同筆と認めて

よいであろう。

三 その他の資料

その他、基熙筆とされる筆跡としては、

1 宮内庁書陵部所蔵「禁裏御会始和歌懐紙 梅花薰砌」の

うちの一作（有栖13）（杉本まゆ子氏ご教示）（図13）、

2 『武家百人一首色紙帖』（500-178）

3 「近衛基熙消息」（料紙は檀紙）（桂-1219）

などがある。基熙筆であると確定し得ることは、遺品が多くそ

の筆跡の比較が可能なことによる。「1」と「2」の和歌につ

いて使用文字の比較をしていく。

(1) 春日同詠梅花薰砌

和歌

右大臣藤原基熙

咲しより御階に

ちかき袖ことにあま

りてふかき梅か香

そする

右の使用文字を先掲の翻刻「第八十七段」（図版「下8」と
対照してみる。

1 より
「女かたより」（第4紙第4行）

2 ち**（かき）
「家のうちに」（4・4）

3 （袖）**こと**（に）
「1」に同じ。

4 （あ）**まりて**
「めにことも」（4・2）

5 ま**
「おしまさりけり」（4・8）

6 さす**（4・7）

右の点検の結果、「か・よ・り・ち・こ・と・り・て・ま・す」等は一致すると認められる。また「よ」の文字については、書陵部所蔵「近衛基熙消息」(桂 1219)と照合の結果、「いゝわゝる入しよし／瀧ものより／とよめりて家にかへりきぬ／男より」(図版省略)の事例から同筆であると認めてよい、と考えられる。

(2) 『武家百人一首』

色紙画帖、縦二四・〇糎×横二二・三糎の折帖仕立て、表紙は鉄紺地に雲形の金襴、四隅に蔓草文の浮彫のある銅の金具で止め、見返しは鶯色地に金・萌黄色の箔を置く装丁。中央に煉瓦色の題簽に「武家百人一首」(縦一八・〇糎×四・四糎)と記す。台紙は鳥の子)冒頭の鷹司関白に続く第二首に次の歌がある。

近衛左大臣基熙公(右肩短冊状極書)

贈従三位源満仲

君はよし行する
とをしとまる身

待ほといか
の

あらむとすらむ(図14)

この歌の「よ・し・と・を・ま・ほ・と・か・す・ら」の文

字も『伊勢物語』絵巻と同筆である。ことに字母「本」には顕著な特徴がある。

二番目の「贈従三位源満仲」の染筆者近衛左大臣基熙公は、『公卿補任』(第四篇)によれば、延宝五年(一六七七)丁十二月八日転左大臣(基熙三十)、元禄三年^{壬寅}正月十三日詔関白氏長者牛車兵杖。十二月廿六日辞左大臣。冒頭の「経基王」を染筆した鷹司関白房輔公は染筆当時関白(寛文九年^{己酉}関白正二位^{三十一}氏長者)で、同職を天和二年^{壬戌}(一六八二)二月十八日(四十六)に辞している。ところで、本色紙帖には「武家百人一首筆者目録」を付随し、「右之目録依所望令書写遣之者也」延宝八曆十月日「基輔写」と記す。本画帖成立の下限を「延宝八曆」(一六八〇年)とすると、基熙三十から三十三歳、房輔公四十一から四十四歳の間の作といえる。

基賢の筆跡としては、漢字仮名交じり文あるいは和歌のみで対応する漢字がないため、漢字奥書の比較対象にはならないが、大英図書館所蔵『源氏物語詞』の「夕霧」帖¹⁸がある。当時、基賢は中納言であった。また同様の例に、宮内庁書陵部所蔵『武家百人一首色紙帖』(500-178)のうちの一帖に次掲の歌がある。

東園大納言基賢卿

平泰時

朝臣

世中にあさはあと
なぐなりにけり心の

まゝの蓬のみ

し

て

久かたの光

のとけき

はるの

日に

しつ心なく

花の

ちるらむ

皇太后宮大夫俊成

その他に同書陵部所蔵「春日同詠梅花薫砌 和歌」がある。

権大納言藤原基賢

もろ人のそてに

のとけき嬉しさを梅

も御墻の香にあま

るらむ(図15)

これは署名が対照資料に数えられるだろうか。

その他、極書に基賢筆とする作品に「ウイーン国立民族学博

物館所蔵『百人一首』(フランツ・フェルディナンド大公

〈Erzherzog Franz Ferdinand von Österreich-Este〉旧蔵。

一八九三年入館。縦二五・五糎×二三・八糎)に次掲の33番歌

「東園前大納言基賢卿 紀友則(「琴山」黒印)」および83番歌

「東園前大納言基賢卿 俊成(「琴山」黒印)」がある。いずれ

も対照文字はなく参考にはならないが基賢の書写例として記しておく。

よのなかよ

道こそなけれ

おもひ

いる

山のおくにも

しかそなく

なる

なお本作品については別稿で述べる予定である。

基賢については、『葉室頼業記』に年中行事の御下書を拝観した折のことを次のように記す。

寛文四年閏五月二日、晴、法皇御幸、今日先年後光明院へ

被遊候テ被進候年中行事之御下書、少々残り候故法皇御代

之様子、近々事之様子被遊被加、法皇宸筆ニテ一冊被遊、

今日禁中へ被進候也、園大納言、正親町大納言、東園中納

言、頼業四人之外へハ無他見様との仰也、

紀友則

ここに登場する後水尾法皇の近習四人はいずれも先に述べた大英図書館所蔵『源氏物語詞』の染筆者でもある。当時禁裏では『源氏物語』に並び『伊勢物語』はしばしば読まれていたよう、後水尾院が『伊勢物語』を講釈された様子を『後水尾天皇実録』明暦二年（一六五六）八月条に『伊勢物語聞書』の記述を引いて次のように記している。

後水尾院御講自明暦二年八月廿一日、到
壬戌九月廿九日御満座、

聴衆

妙法院宮親王カ聖護院宮道法王カ飛鳥井大納言雅章卿カ、

初座八月廿一日二同三九月四日四同日五同日六同日七同日

八同日九同日十同日十一同日十二同日十三同日十四同日十五同日十六同日十七同日十八同日十九同日二十同日二十一同日二十二同日二十三同日二十四同日二十五同日二十六同日二十七同日二十八同日二十九同日三十同日

此御講聞書上下二本此抄ト大同小異アリテ、諸説語異アリテ其意同シ、其説少シク詳略互見スモシ同時ノ聞書ニテ

其記者異アルカ、可動（マ）奠書云、

此飛鳥井一位秘本拜写之、正徳四年甲午七月十六日初八月七日於簡黙亭書終、随得、

又一條（朱書）禪閣ノ御講抄ト云ヒ、或ハ逍遙院殿聞書、又紹巴聞書序アリ名ナシ、此三部其説簡略ニシテ其意ハ同シ、可併考、

御講釈は八月二十一日にはじまり、九月二十九日に竟る、とある。このように禁裏では後水尾院により『源氏物語』とともに『伊勢物語』は講ぜられていたし、その聴聞者の一人に道晃法親王もいた。書陵部所蔵「伊勢物語 天福本 道晃親王御筆

（鷹）一冊 函号 六五¹¹」があり、次の奥書がある。

天福二年正月廿日己未申刻凌桑門

之盲目連日風雪之中遂此書写

為授鐘愛之孫女也

同廿二日校了

この後に

此物語寛永廿年三月

十四日戌刻筆立翌

日戌下剋書切畢

道晃（花押）

とある。すなわち本書は、天福二年定家本を書き写した道晃法親王筆本である。

まとめにかえて

『基熙公記』によると、先述の基賢奥書の年紀寛文八年をやや降るが、天和二年壬戌（一六八二）四月八日壬子条に「午刻参新院（靈元天皇カ）伊勢物語御講談」、同十二日丙辰条に「参新院伊勢物語御講談也」とある。左大臣基熙歳卅五であった。貞享二年乙丑歳五月十一日条後西院御遺物目録に「古今集 為相卿筆」「後奈良院宸筆 伊勢物語」等。また同年九月廿一日戊申条に次のように見える。

去年以来伊勢物語講談断絶之処有所望人々
仍今日再興裏松宰相兼連時方行豊光忠等朝
臣時香季盛兼寿其外聴衆数多講談了（下略）

同年十一月六日壬戌条「談伊勢物語聴聞人々如先日
同年同月七日癸亥条「談伊勢物語聴衆如昨日
同年同月十八日甲戌条「談伊勢物語聴衆如例」

このようにみても、『基熙公記』に、基熙が『伊勢物語』を直写した記事はいまのところ見出し得ないが、当時禁裏で盛んに講じられていた書であり、「土佐将監光起筆」と当時二十代をむかえたばかりの「近衛基熙」の直筆であるこの絵巻は、まさに東園基賢の記したように「貴墨・奇珍」の書なのである。同時に想起されるのは、大英博物館所蔵『伊勢物語』全五卷¹³・伝土佐光起筆であるが、土佐光起筆である本絵巻の魅力は語り尽くせない。

本文については触れることを控えたが、章段の全文をそのまま引いているのは一段、二十九段、五十八段、百六段等である。その他、四段、十二段、八十七段、九十九段等は、末尾を和歌でとめ、後続の一行ほどの情景の説明あるいは作者の趣向を述べる文言は省いている。例えば、「東下り」九段は「富士の山」以下の「名にしおはば……」までの抄出であり、後続の「とよめりければ、舟こそりて泣きにけり」と歌によって望郷の思いを触発された舟中の一行が感泣する部分は省かれている。

注

(1) 村上翠亭・高橋弘一監修『古筆鑑定必携 古筆と極札』二〇〇四(平成十六)年 淡交社 二四頁

(2) 注(1)に同じ。八六・八七頁

(3) 高柳光寿・角川・第二版日本史辞典 角川書店 一九八三(昭和五十八)年

(4) 正宗敦夫『諸家伝』三 復刻 日本古典全集 一九七八(昭和五十三)年 九六八・九六九頁

(5) 敦賀市立博物館編集『特別展 近世における大和絵の展開』一九九四(平成六)年 七七・八一頁

(6) 拙著『在外日本重要絵巻集成』【研究編】一三六頁・【影印編】四三六頁 笠間書院 二〇一一年

(7) 注(6)に同じ。【研究編】一三八頁・【影印編】四八六頁

(8) 注(6)に同じ。【影印編】一一六頁

(9) 藤井讓治 吉岡眞之監修『後水尾天皇実録』第二卷 二〇〇五年一〇〇九頁

(10) 注(9)に同じ。九三二・九三三頁

(11) 宮内庁書陵部『和漢図書分類目録』一九五一(昭和二十六)年三月 五八六頁

(12) 宮内庁書陵部所蔵『基熙公記』番号19337 冊数26 函号25-25

(13) 大英博物館所蔵本については、二〇一一年九月に、次の二作品を調査した。一つは、Add. 5. 9 (G. B. Dodwell 旧蔵、1920年度入館)。外桐箱、黒漆内箱入。白紙題簽(外題縦一四・一横×横三・三横)に『伊勢物語』一二・三・四・五」と記す。全五巻、無款。江戸前期) 折紙の外包紙に、

土佐光起画 折紙極
徳大寺実維卿 詞書

折紙の内包紙の表に、
と記す。

内書に、
土佐左近将監光起画
伊勢物語絵巻五卷
極彩色 詞書

徳大寺実維卿

右伝来之通真跡無疑者也

己酉 二月 古筆了仲「筆跡関」（朱文長方印）

とある。右の極書については、これまで紹介されていないようなので記しておく。本絵巻については、『秘蔵日本美術大観 二 大英博物館II』(講談社 一九九二年)に八図(338)を掲載している。また、石川「透氏」が『伊勢物語』における奈良絵本・絵巻(山本登朗 ジョシュア・モストウ編『伊勢物語 創造と変容』和泉書院 二〇〇九年 二一八頁)で取りあげている。

一はWilliam Anderson旧蔵の『伊勢物語画帖』(Nos. 187-195)である。形状は折本形式で、『伊勢物語』の佳所の詞を抜き出し左に、右にそれに対応する住吉如慶画を配し、一対としたものである。江戸時代前期、一八八一年度入館。絹本着色 画帖断簡(九図)各一九・六糎×一七・三糎 落款「住吉法橋筆」印章「法橋」(白文方印)。如慶は大英図書館所蔵『源氏物語詞』の五十四図を描いているように、両書は当時禁裏でも盛んに講読・書写されていた。如慶の明るく透明感のある彩色で、『秘蔵日本美術大観 二』に

全九図(21-29)が掲載されている。詞書はない。

(14) 堀内秀晃校注『竹取物語 伊勢物語』(学習院大学蔵伝定家筆本)

新日本古典文学大系17 岩波書店 一九九七年 九〇頁

(付記)

諸資料の掲載許可をいただいた宮内庁書陵部図書課に厚く御礼申し上げます。また、本絵巻の調査・掲載をご快諾くださった聖徳大学川並弘昭前学長をはじめ同図書館諸氏のご助力に深謝いたします。なお聖徳大学所蔵の絵巻類は一般には公開されていないので、本稿をご参照いただければ幸いです。

本稿は平成22〜24年度科学研究費補助金(課題番号22520192)による研究成果の一部です。

聖徳大学所蔵『伊勢物語(下)』 縦 29.8糎

紙数	横(糎)	詞(行)	絵
見返し	28.4		
第1紙	130.0	18	絵一
第2紙	113.7	28	絵二
第3紙	106.6	7	絵三
第4紙	103.0	8	絵四
第5紙	89.1	9	絵五
第6紙	122.8	6	絵六(落款・印章)
軸付紙	47.2	(奥書)	
本紙計	665.2	82	

聖徳大学所蔵『伊勢物語(上)』 縦 30.0糎

紙数	横(糎)	詞(行)	絵
見返し	28.7		
第1紙	115.0	17	絵一
第2紙	131.8	17	絵二
第3紙	100.0	13	絵三
第4紙	114.6	15	絵四
第5紙	91.4	8	絵五
第6紙	99.4	7	絵六(落款・印章)
軸付紙	49.5		
本紙計	652.2	77	

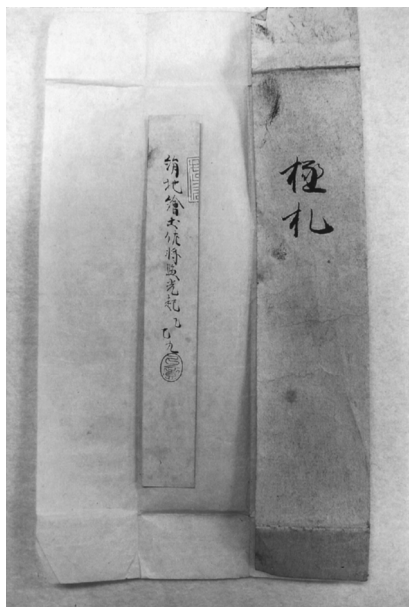


图 2



图 1



图 7



图 6



图 5

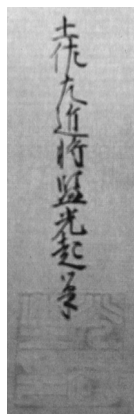


图 4



图 3

いたしをいしてつらなりてなれ家
 かまもれままはれうしつらならしつら
 せわそのゆらふとならぬいひさし
 つらまふらめおのこもまふら
 おれれもれまふらもまふら
 ああけしつらまふらまふら
 をあらかんわのらぬまふら
 せまふらまふらのらなりまふら
 なんまふらまふら
巻末ふらまふらのらなりまふら
 三のらまふらまふらまふら
 まふらまふらまふらまふら
 まふらまふらまふらまふら
 まふらまふらまふらまふら

図 8-1

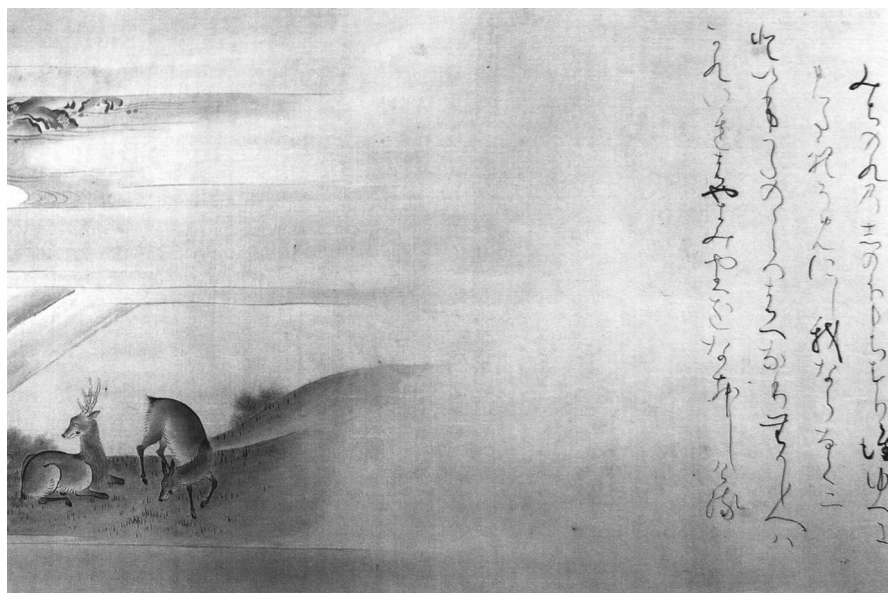


図 8-2

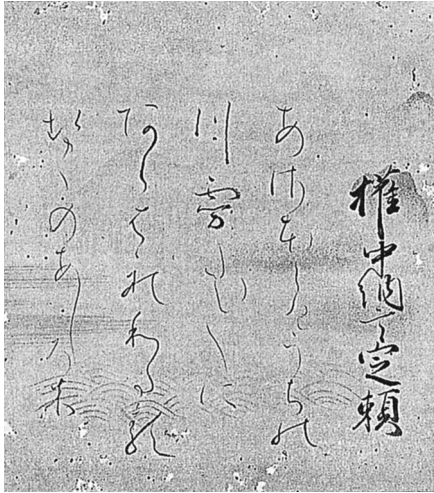


図10

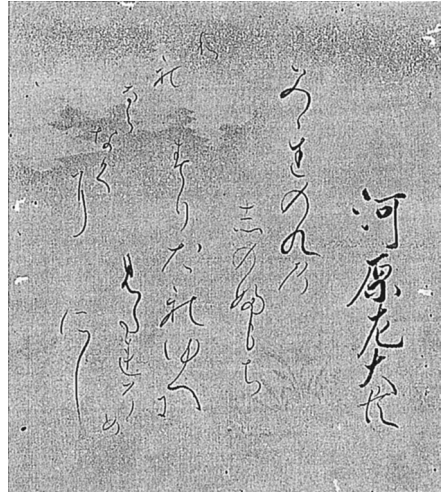


図9

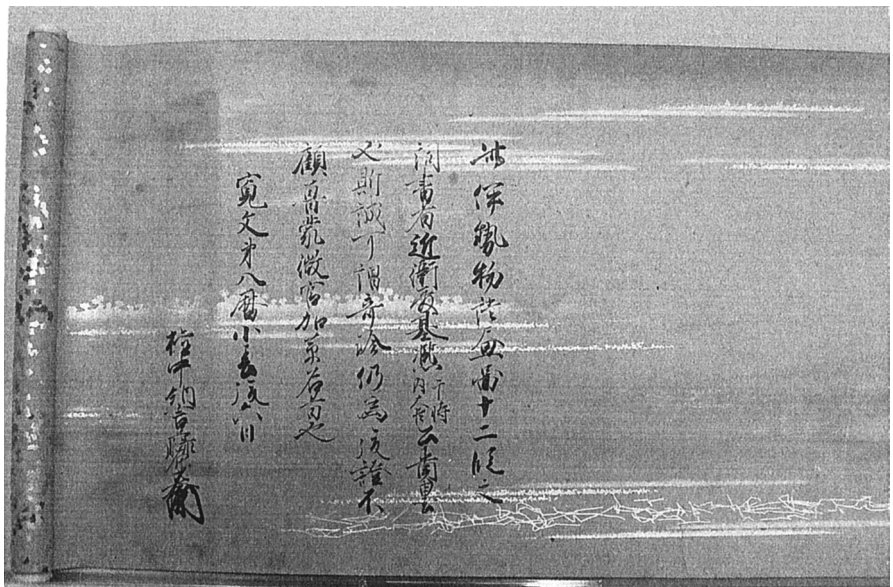


図11

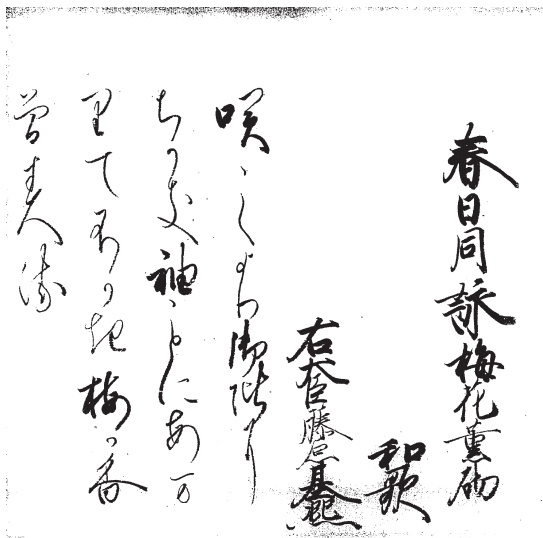


图13

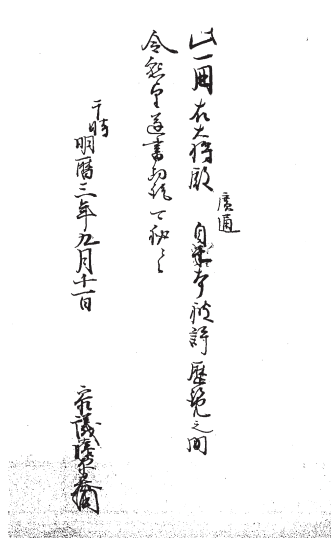


图12

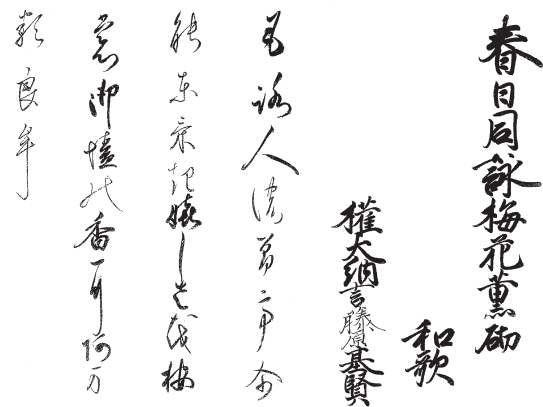


图15

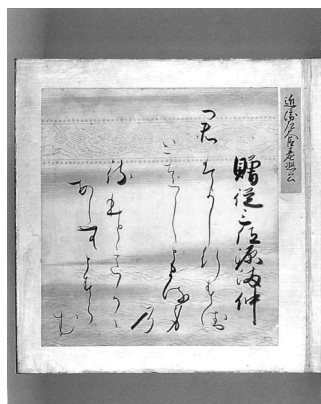
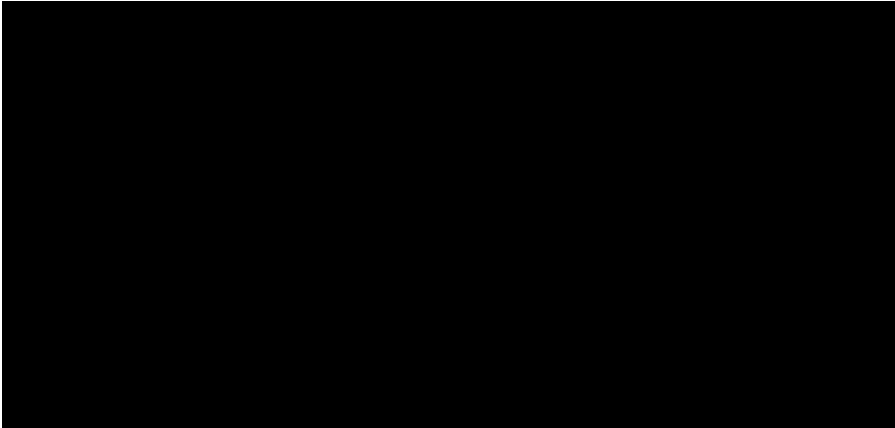
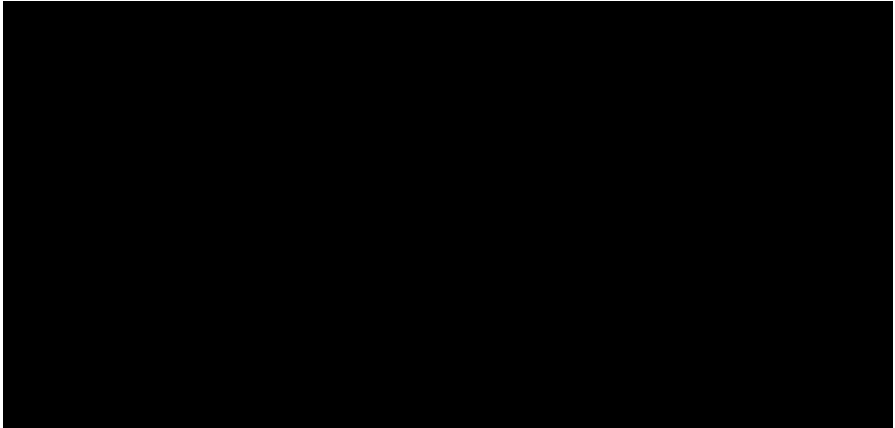


图14



上 1

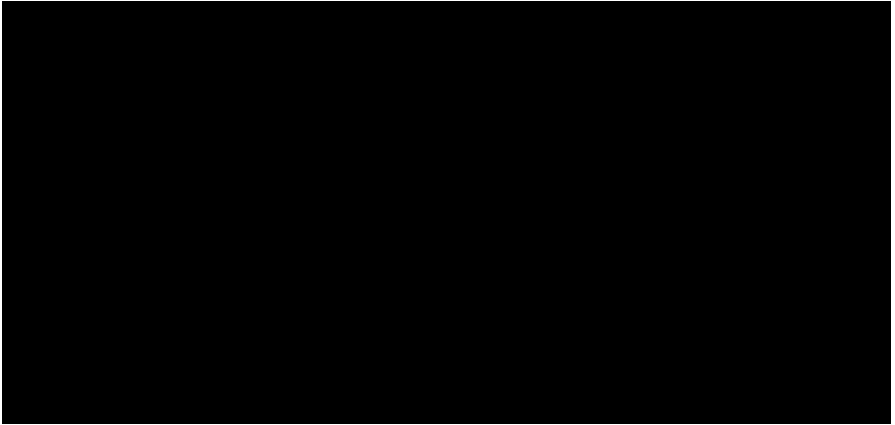


上 2

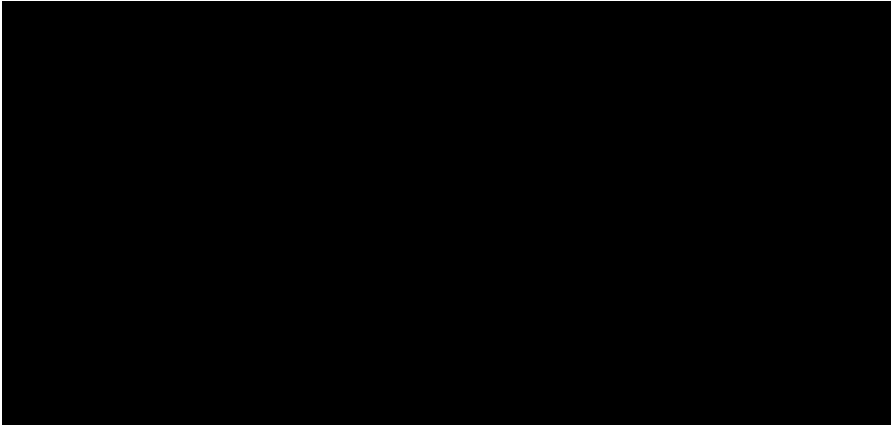


上 3

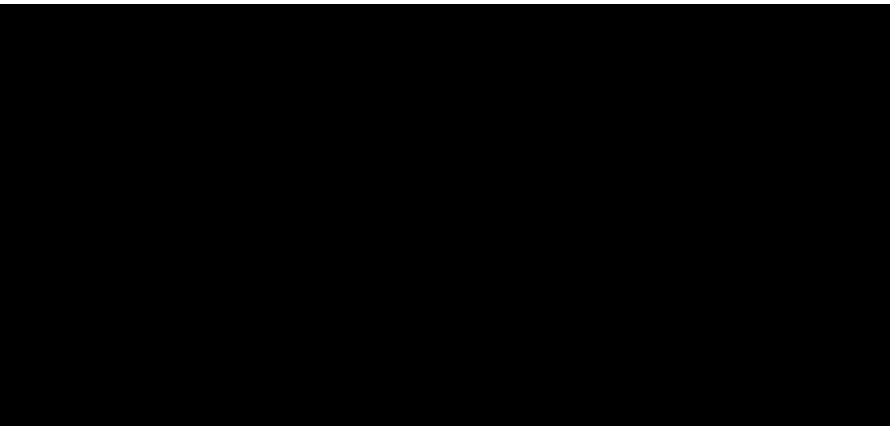
上 4



上 5



上 6





上 7



上 8



上 9

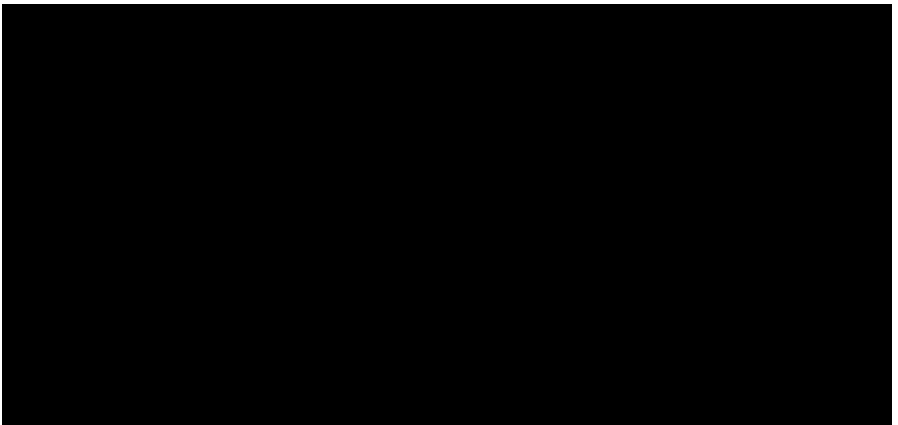
上10

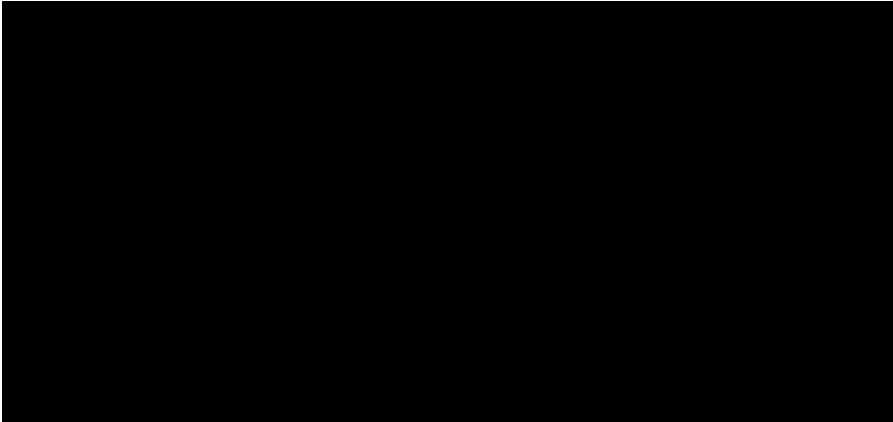


上11

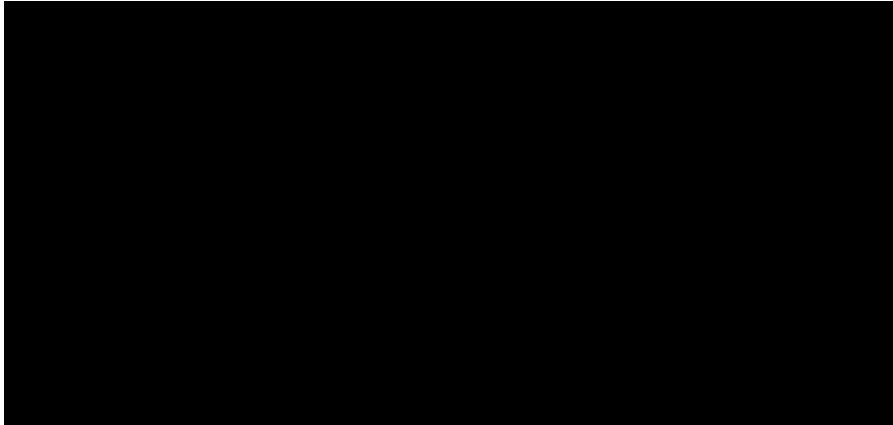


上12

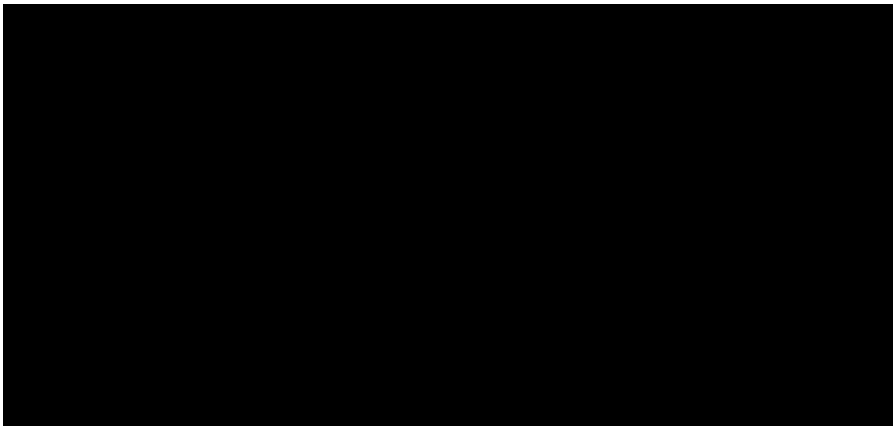




上13

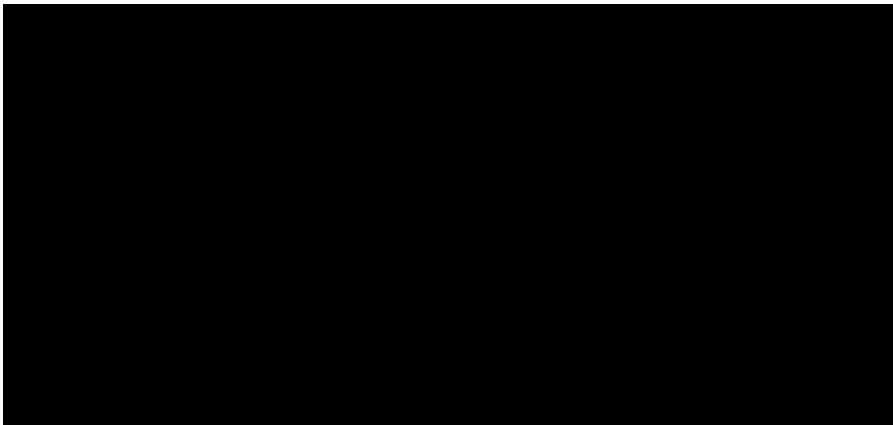


上14

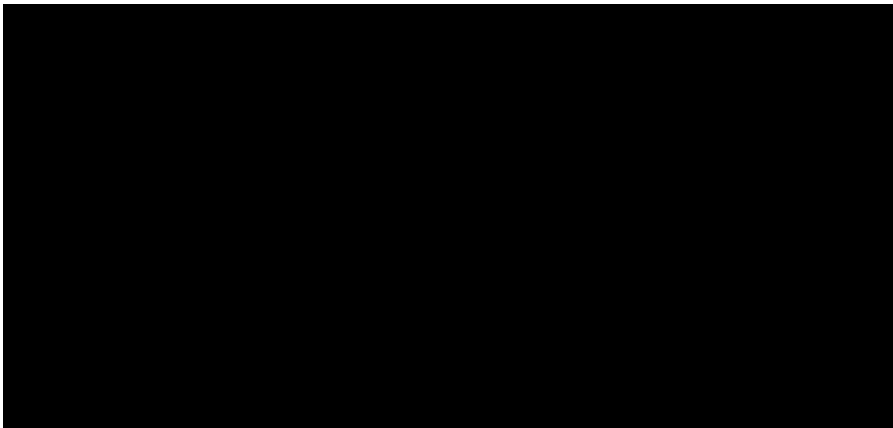


上15

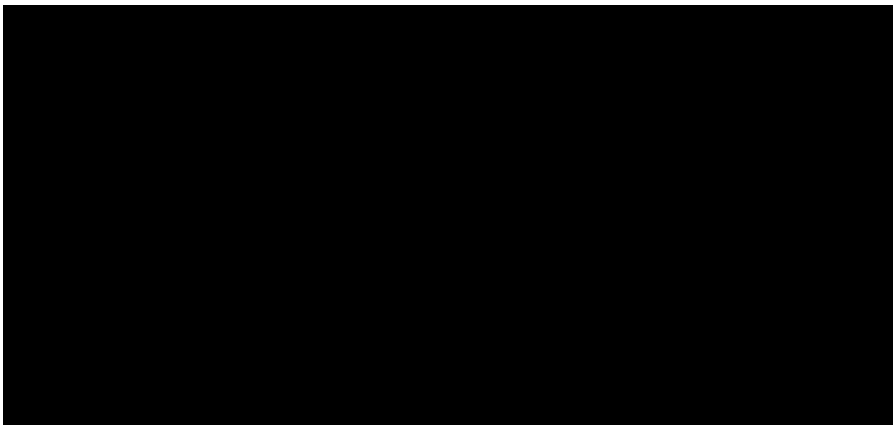
上16

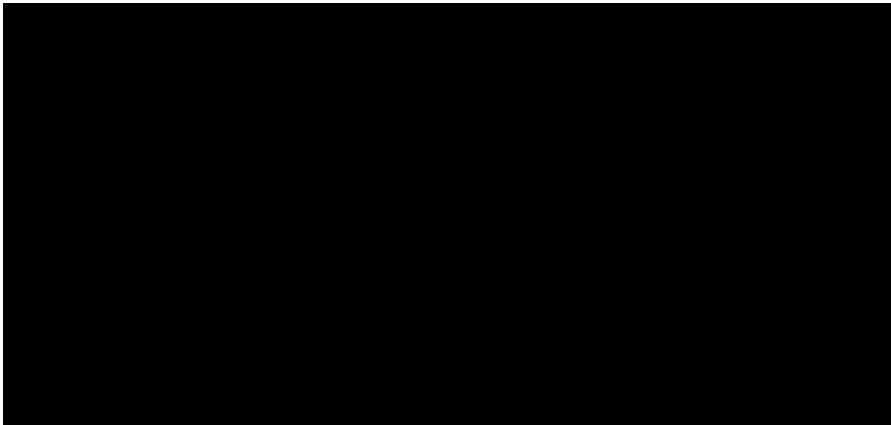


下1

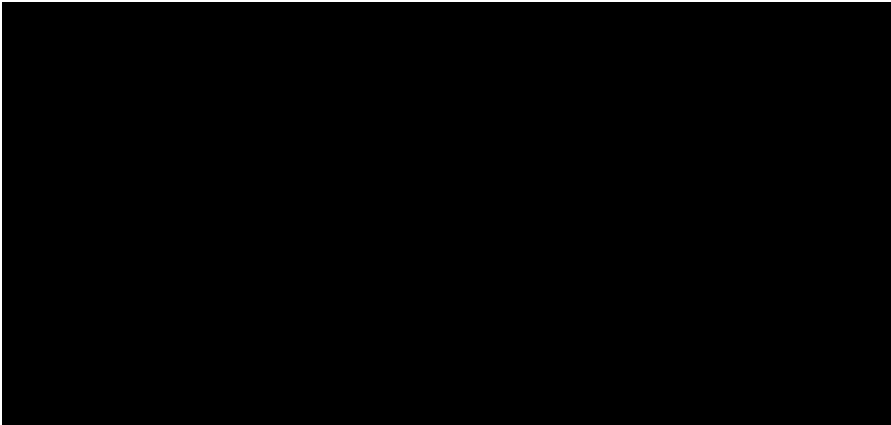


下2

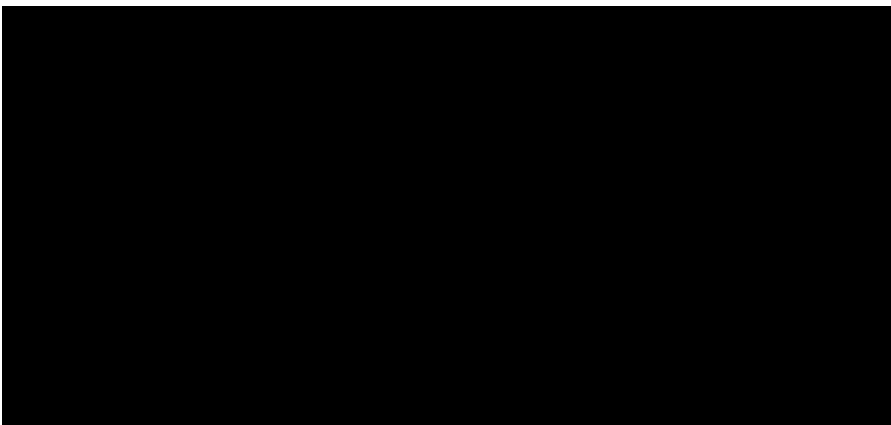




下 3



下 4

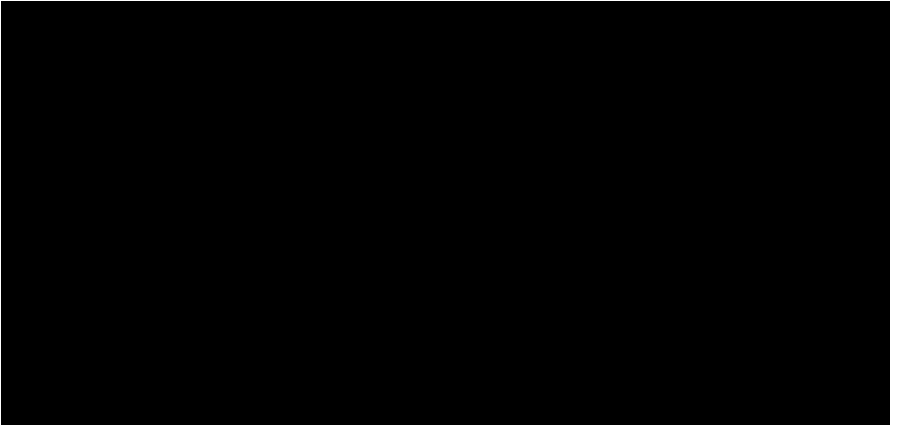


下 5

下 6

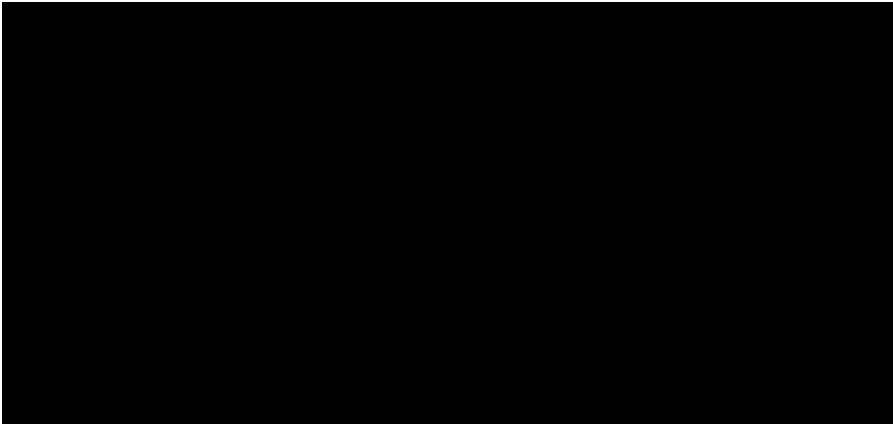


下 7

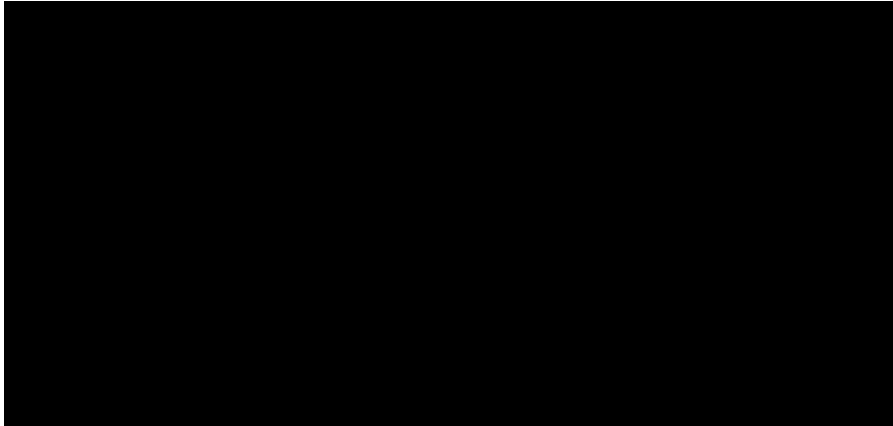


下 8

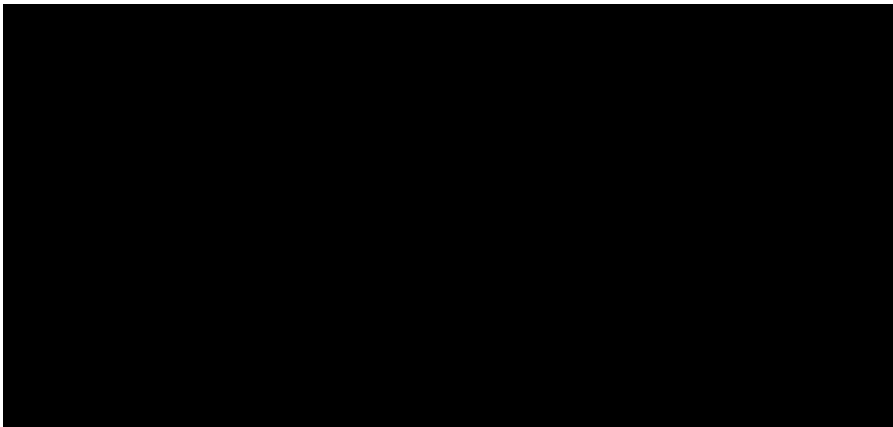




下 9



下10

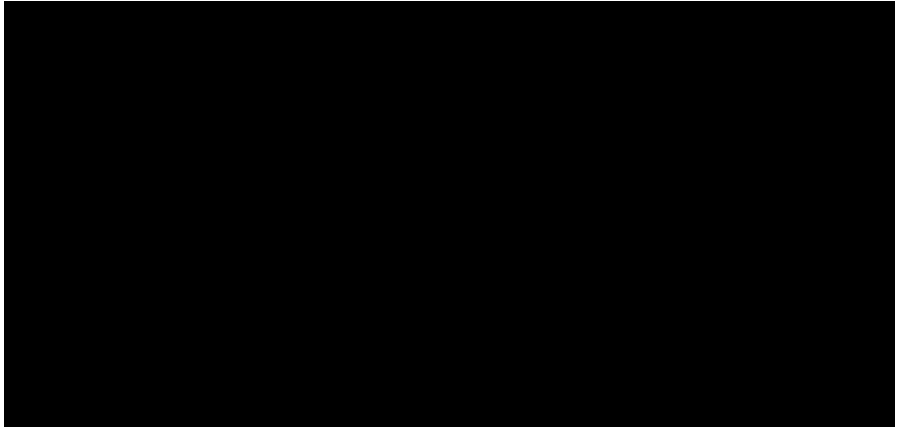


下11

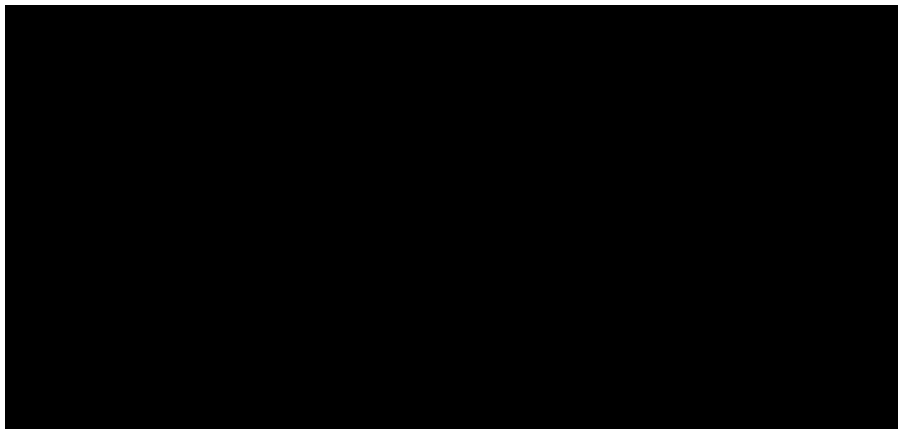
下12

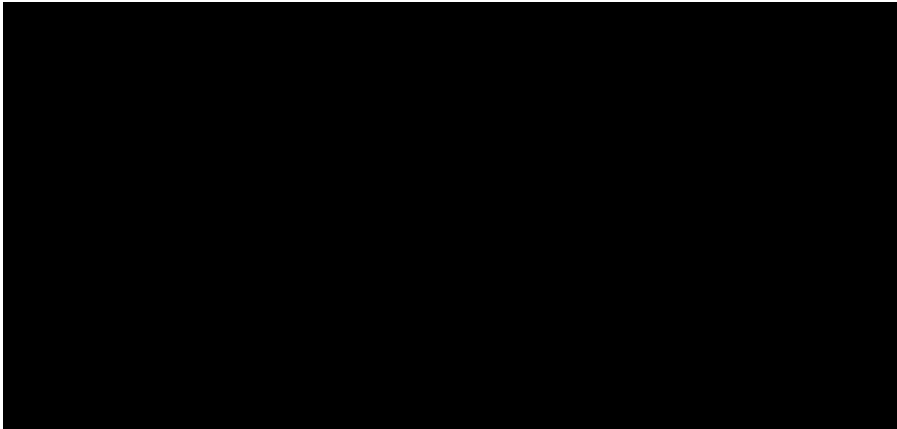


下13



下14





下15